たとえ報われなかろうとも

キュ〜ブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
たとえ報われなかろうとも

【Ｎコード】
Ｎ３９６５Ｖ

【作者名】
キュ～ブ

【あらすじ】
こう、思ったことはありませんか。自分の周りから人がいなくなくなったら、自分は一体如何なってしまうのか、と。悲しむでしょうか、喚くでしょうか、狂ってしまうのでしょうか。どちらにせよ、耐えることなど出来ないでしょう。しかし彼は耐えたのでした。決して抜け出せない地獄に。そんな、強い心を持った彼は、子供を助けて死んだと思ったら突然当たり一面真っ白の空間に。
「此処は……、一体何処だ？」――そんなお話。

プロローグ

これは、一人の孤独な男の物語。
唯の一度も報われることのなかった、悲しい男の物語。

彼に、家族なんていなかった。友と呼べるものもいなかった。
理由は至極簡単。

『才能』だ。

彼には、才能がなかったのだ。
それは、勉学の才能、運動の才能、料理の才能、果ては人に好かれる才能。
挙げたらキリがない。

そう――それ故に家族には半ば捨てられるような状態になり、友なども当然できなかった。
――想像できるだろうか。周りには味方が誰一人として存在しないその光景を。
――耐えられるだろうか。すべてのモノに拒絶されるそんな状況に。

――――だが、彼は耐えられたのだ。

皮肉にも、彼には『ソレ』に耐えうる精神力、忍耐力といったものを持ち合わせていたのだった。
だが、だからこそ彼は常に前を見続ける事ができたのだ。
立ち止まらなかった。歩き続けた。
たとえ、報われない事だとわかりきっていても。
彼は、馬鹿みたいに努力をし続け、決して諦めなかったのだ。

これは、そんな一人の孤独な男の物語。
決して報われることのなかった……男の、物語である。

第一話　全テノ始マリ。（前書き）

遅くなって申し訳ありません。
では、どうぞ。

第一話　全テノ始マリ。

その男、白石翔は走っていた。

恐らく、トレーニング中なのだろう。
彼の服装は、上下とも真っ黒で動きやすそうなジャージを着ており、足元には履き慣れていそうな運動靴という格好だった。靴の方は相当使い込まれているのか、様々な箇所に汚れが付いている。
土手からの帰りなのだろうか？
靴底には土や草などがこびり付いていた。
彼は百八十五センチメートルという比較的高い身長で、整った顔立ちをしているがやや鋭い目つきをしていた。

「ハァ、ハァ、……ふぅ」

今現在彼が走っているのは、幅の広い二車線の車道脇の歩道だった。
その歩道はとてもきれいに舗装されていて、走りやすそうだった。
……まあ、走りやすいといっても地面は硬いアスファルトなので、足には良く無さそうであるが。

「む……？　あれは？」

そこで彼は何かを見つけたようにふと、足を止めた。

彼の視線の先には小さい――恐らく三、四歳程度だろう――子供がいて、隣にはその子の母親がいて、子供と共に手を繋ぎ談笑し合っていた。
その光景は、通行人の暖かい笑みを誘うような、そんな光景。

「フッ……」

そしてそれは彼も例外ではなく、顔には笑みが浮かんでいた。
だがしかし、それは普通の人が浮かべるそれでなく、何かを羨むような、悲しむような、そんな複雑な表情だった。

「……さて。また、走るとするか」

彼は何かを振り切るように数度頭を振り、再度走り始めようと足を進めた。
そこに。

ガァァァアアン！！！！

「！？」

突然の大気を震わす轟音に驚き、音の発信源に顔を向けた。
そこには、猛スピードで疾走、いや、爆走と表した方が良いだろうか。

とてつもない速度で道路を暴走している大型トラックが、其処にはあった。

「オイオイ……！　一体全体、何がどうなってんだ！？」

あまりの唐突な出来事に、思わず翔は狼狽える。
だがそれも束の間――――翔はすぐさま冷静さを取り戻し、状況確認を急ぐ。
真っ先に運転手の状態を確認するため、ぐっと目を凝らす。するとそこには――

「苦しんでる……？　もしかして、発作か何かか！？」

タイミングが悪い、と翔は吐き捨てるようにつぶやく。
現在、運転手は胸に手を当てうずくまっている。あれでは意識があるかどうかさえも怪しい。
ソレを確認したのち、翔の状況確認は次の段階に進む。それはつまり、トラックの進行方向への障害物の有無。
翔は急いでトラックの進行方向へと目を向ける。

「あれは……さっきの子供じゃないか……！」

結果は……障害物、アリ。
それは先ほどの子供で、真っ白な横断歩道にポカンとした様子で

呆けて突っ立ている。
両脇の歩道には通行人が集まっているが、だれも子供のもとに行こうとはしない。
親も必死に子供に向かって声をかけているが、全く反応を返さない。

「クッソッ！！」

翔は子供のもとへと必死に駆けた。だが、横断歩道までの距離が遠すぎる。
それに走るスピードが異様に――遅い。そう、遅すぎるのだ。この距離に加えてこのスピード。到底間に合うことはないだろう。

そして、そんなことは翔もわかっていた。こんな状況でも冷静さを全く失わない彼の頭脳は、こう告げていた。

――もう、間に合う訳が無い――

それでも彼は走り続けた。諦めなかった、諦めたくなかったのだ。

――でも、そんなことでこの現実はひっくり返せない。

彼が横断歩道の端に着き、人込みをすり抜けたころには、もうトラックと子供は衝突寸前。
……間に合う訳が無かった。所詮、彼の貧弱な身体能力では成し遂げられる所業などではなかったのだ。
しかし、もうムリだと確信しても尚、彼の表情には諦めなど浮かんでいなかった。

――諦めて、たまるか……！――

――もう、何もできずに終わるのは嫌なんだ……！――

そして、彼は思いっ切り足を踏み出し、跳躍しようとする。
――すると。

バギン、と。
何かが砕けるような音が――弾け飛ぶような音が、脳の奥から聞こえた。
そして変化が起こった。
彼がおもいきり地面を蹴ると、辺りには爆発音のようなものが轟き、アスファルトの地面が抉れた。
そして、目にもとまらぬ速さで子供へと一直線に飛んでいき、彼は夢中で向こう側の歩道へと突き飛ばす。

――それと同時にくる横からの衝撃。

『撥ねられた』。そう理解すると同時に、地面に激しく叩き付けられる。

さながらスーパーボールの様に、為す術も無いまま勢いよくバウンドしてゆく。

やがてその勢いは止まり、衝突によって生まれた衝撃は完全にストップした。

それと同時に、彼は悟る。

――嗚呼、俺は、死ぬのか――

と。

まるで他人事のように。何でもないように、ただ漠然とそう思った。

自分の命が流れ出ていくようなのを感じながら。

ふと、視界の隅に例の親子が見えた。

翔に向かって、必死に何かの声をかけている。目には涙を浮かべながら。

しかし、それは彼の耳には届かない。ダメージのせいで、感覚が狂いに狂っているのだ。

それでも、きっと心配してくれてるんだろうなあと思いながら。

こんなことを、思いついた。

――俺の人生、報われも、救われもしなかった――

――しかも最期はこんな終わり方。……本当に、まったくもって最悪だ――

――……ま、でも――

彼は微笑みながら。

――こんな終わり方も――

――……悪くは……、ないかなぁ。

そんな、実に下らない事を考えながら。

彼は、ゆっくりと――

……意識を、手放したのだった。

これが俺、白石翔の最期。
実にありがちで、最っ低な幕引きだ。
……けれど俺は、こんな人生でも悪くはなかったって、そう思える。
偽善なのかもしれない。けれど、それが偽善だったとしても、一人の命を救うことはできた。

だから、俺は後悔なんてしてないしやって良かったって思ってる。
たとえ俺の人生がどんなに無価値で、クソッタレなものだったとしても。意味はあった。決して無駄なんかじゃあなかった。

……少なくとも俺は――

――少なくとも俺は、そう、信じてる。

第一話　全テノ始マリ。（後書き）

激しく駄文。
見返してからそう思う自分がここにいます。

さて、どうだったでしょうか？
遅くなって申し訳ありません。お待たせ……してないかもしれませんが。
最後まで読んでくださった方には感謝を。
できれば次回も読んでくだされば、そう思っております。

感想、誤字脱字の指摘等々、心よりお待ちしております。

黒の世界（前書き）

最初に、投稿がとても遅くなり申し訳ありませんでした。
もとより期待はしていないとは思いますが、これからは暇を見つけ次第投稿していくのでどうかよろしくお願いします。

黒の世界

『黒』。

表現するのなら、これが一番適当だろう。
あたり一面黒、黒、黒。見事に真っ暗だった。
そんな空間に、俺、白石翔はゆったりと身を任せるようにふわふわと漂っていた。

「……。此処は一体？　俺は確か……そう、死んだはずだが……」

脳裏には、先程の事故の光景が鮮明に映し出されていた。
そう、俺は死んだはずだ。死ぬ直前、意識を失う寸前までの記憶ははっきりとある。
と、なると……？

「死後の世界……。いや、地獄か……？」

死後の世界。冥界、地獄、天国、あの世――。つまりは、その様な所なのだろうか？
流石にこんな一面漆黒の空間が天国だとは思い難い。
天国なんて実際に見たことなどないし、そもそも本当にあるのかもわからないので断言できることでもないが。

「……はぁ。生前も生前だったら、死後も死後、か……。まったくもって、ついてない」

思わずタメ息が出る。
仕方も無いだろう。死んだと思ったらこんな密閉空間に閉じ込められ、抜け出す術もナシ。今のところは、だが。
タメ息だってつきたくなる。イヤ、常人だったらタメ息どころじゃない。こんな色彩に乏しく変化もクソも無いようなところに一人閉じ込められれば、いつ発狂したっておかしくないはずだ。多分。
その辺は、自分の昔からある変な図太さのようなものに感謝といったところか。

――しかし、これ以上ここにいるといくら無神経なヤツでも耐えきれないだろう。結果はわからないが、試してみたくもない。

「……ん？」

そんな実に下らない問答を脳内で繰り広げていると、何か遠くに光の点が見えた。
一面黒なのでイマイチ遠近感がつかめないが、心なしか、近づいてきているような気さえする。
と、いうか近づいてきている。しかも猛スピードで。先程衝突したトラックなど止まって見えるかのような速度で。冷静に分析なんかしているが、このままだと自分がヤバいのではないだろうか。

が、その心配は杞憂に終わったようだ。
ソレは俺の目の前でいきなりぴたりと止まる。
それは縦に長い何かであった。おおよそ縦２，５メートル、横０，７メートル程度だろうか。
特に目立った特徴もなく、装飾や突起している部分もない。それはただ、光り輝いていた。
横から見てみると、厚さは存在ほとんど存在しない。紙のように薄っぺらいものだった。

裏も同様。特筆すべき点はない。

「……これはなんなんだ？　俺の目の前で止まったということは、何か意味があるのだろうか……」

この現在も神々しく発光しつづけている板がどういうモノなのかはまったくわからないが、何か仕掛けが施されているようにも見えない。

スイッチや、レバーなども存在しないし……。

危険かもしれないが、思い切って触れて反応を見るべきだろうか？

そう思いながらも、覚悟を決めて手首まで突っ込んでみる。

すると。

「……。え？」

思いっきり、吸い込まれた

――それはもう、凄い勢いで。

黒の世界（後書き）

今後の展開を考え、章をつけさせてもらいました。
プロットもクソもない駄文ですが、脳内では結構長く続くつもりなので、よろしくお願いします。

お気に入り登録が二件も！　ありがとうございます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3965v/

たとえ報われなかろうとも

2011年10月28日17時12分発行